

2021年6月13日

大井バプテスト教会

説教題「からし種一粒の信仰 ～よこしまな時代の中で～」

マタイ 17章14～20節 主任牧師 加藤 誠

**イエスは言われた。「信仰が薄いからだ。はっきり言っておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何も無い。』(マタイ 17章 20節)**

主イエスの前に一人の父親がひざまずいて息子の癒しを願いました。息子は「子ども」と呼ばれる年齢だったようですから、小学生くらいだったのでしょうか。ずっとてんかんに苦しんできたようです。「たびたび火の中、水の中に倒れる」というのですから、毎日、親として気が休まる時がなかったことでしょう。

てんかんは、脳内の細胞に電気信号が過剰に流れて意識障害やけいれんなどの発作を起こす病気です。今では良い薬ができて発作を抑えられるようになりましたが、医学の発達していない時代には、病気はすべて悪霊に取りつかれて起こると考えられ、特にてんかんは悪霊の親玉がとりついている、質の悪い病気と考えられたために、忌み嫌われ、本人も家族も周囲からの厳しい偏見のまなざしに苦しめられたようです。息子の苦しみは、父親の、そして家族の苦しみでした。

ちょうど主イエスがペトロたちと高い山に登っておられて不在だったので、父親は弟子たちに癒してもらおうとしたのですが、残念ながら弟子たちは癒すことが出来ず、主イエスの帰りを今か今かと待っていたのでした。

「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。…いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をここに、わたしのところに連れて来なさい」。

この主イエスの言葉には憤りのようなものを感じます。いったい主イエスは誰に対して怒っておられるのでしょうか。父親にでしょうか。てんかんの子どもを癒すことのできなかった弟子たちにでしょうか。あるいは他の人々に対してでしょうか。

「信仰のない」というのは「神を見ようとしない、無視している」という意味であり、「よこしまな時代」というのは「邪悪な」とか「ねじ曲がった」という意味です。「神の国と神の義」がまったく見出せない時代と理解できるかもしれません。そのような時代を生きている私たちの中に信仰の灯を灯すために、「それでも神さまを信じて生きていこう！」という思いを起こすために、主イエスは来て下さったのですが、なかなかその信仰が私たちの間に生まれえない、根づかない、そのことへの悲しみのこもった苛立ちに似た気持ちがあらわされた言葉なのかもしれません。

けれども、そのような悲しみと苛立ちを口にされながらも、主イエスの言葉によって悪霊は出て行き、てんかんの子どもは癒されたのでした。

「弟子たちはひそかにイエスのところに来て、『なぜ、わたしたちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか』と言った」。「ひそかに」という言葉が、弟子たちの気持ちをよくあらわしていると思います。弟子としての面目まるつぶれ。息子の病を

癒されて喜ぶ父親のすぐそばで、下を向くほかなかなか、恥ずかしい思いをしたことでしょう。その弟子たちに主イエスは「信仰が薄いからだ」と言われました。

「信仰が薄い」とはどういうことでしょうか。マタイ福音書では、山上の説教で「野の花、空の鳥を見なさい」と聞いていながら、何を着ようか、何を食べようかと心煩わせている弟子たちに向けて「信仰が薄い」と言われたり（6:40）、嵐の湖で主イエスが同じ舟に乗っているのに怯えている弟子たちや（8:26）、やはり嵐の湖の上を歩きだしながら主イエスから目をそらしてしまって湖に沈みかけたペトロに対して「信仰が薄い」と言われています（14:31）。あるいは五千人の供食や四千人の供食を通して小さなパンをも祝福して用いられる神さまの恵みを体験していながら、パンを持っているか否かの議論をしている弟子たちを「信仰が薄い」と叱っています（16:8）。「信仰がない」わけではないのです。神さまがおられることは分かっているし、求めている。けれども肝心なところで大切なところから目が離れてしまって、ずれてしまい、他のものに心を捕らわれて、神さまの大きな恵みを受けそこなっている。そういう信仰のありようを「信仰が薄い」と言われているのです。

なぜ、弟子たちが子どもの病を癒せなかったのか。そこには弟子であるからこそこの落とし穴があるように思います。「信仰」という名の「不信仰」とある牧師は言われていました。「自分たちは主イエスから教えを受け、信仰を持っているから、癒すことができる」、「わざわざイエスさまを煩わせなくても、自分たちで何とかできる」。ところが「信仰」とはそういうものではない。私たちの所有物ではないからです。むしろいつも「イエスさま、お願いします。あなたの力なしに、私たちは何もできません。あなたの力で、この病の子を癒してください」と祈る。それ以外に私たちにできることはないのです。自分では何もできない。ただ何でもおできになる主イエスに目を注いでいく。それが主イエスが言われている「信仰」なのです。

「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」

「からし種」というのはほんとうに小さなものです。種として持っている自分の力だけでは目を出すことすらできない小さな存在です。けれども土や水や周りの力に包まれる時、つまり神さまの恵みに包まれる時、大きく成長し、どの野菜よりも大きく育つのです。ですから「からし種一粒の信仰」とは「自分では何もできないことを知り、ただ神さまの恵みを見つめていく信仰」のことです。

私たちが生きている世界は「信仰のない、よこしまな時代」。神さまの愛や正しさがなかなか見えない時代。でも、嵐の舟の中に主イエスは一緒に乗り込んでくださっています。私たちの手の中にある小さなパンを喜んで祝福し分かち合ってください。主イエスが共にいてくださるのです。嵐でなかなか先に進めず苦闘している弟子たちのために夜通し祈ってくださっている主イエスがおられるのです。私たちのすぐ近くにすでに備えられている神さまの恵みに目を注ぎ、共に歩まれている主イエスから目を離すことなく従っていきたいのです。